

釧路

——産業を育んだ自然を残す

北海道の東にある釧路は、いくつもの広大な湿原によって成っている。「雄大な」という代名詞が追いつかないほど開けた土地には、珍しい花々や多彩な動物が生息する豊かな自然をたたえている。釧路・厚岸郡にある霧多布湿原では、この希有な自然を残すための活動が、この地に育まれた人々を中心に行われていた。

取材・文 木内 昇 写真 谷山 實



今から二年前のこと。東京出身の夫婦が北海道厚岸郡の浜中町に移り住み、「てんぼうだい」という喫茶店を開いた。

「突然外から来た人が、霧多布湿原の真ん前に喫茶店を作ったので、私たち地元の間は驚いたんです。そのころは喫茶店といえば町中が主流で、自然を見るために喫茶店に行くという発想がなかったんですよ。だって家の窓からは普通に湿原が見えるんですから」

NPO法人・霧多布湿原トラストの理事長を務める三膳時子さんは当時をそう振り返る。その喫茶店のオーナーが、現在、トラストの事務局長を務める伊東俊和さん夫妻だった。こんなところで喫茶店をやって食べていけるの？ 地

元の若者たちは心配半分、興味半分でそこに集うようになった。彼らを相手に、伊東さんは湿原の素晴らしさを語った。ここの自然や景色がいかに特別か。普通なら山を登らないと見られないハクサンチドリやクロユリがこんな身近に咲いていることがいかに貴重か。そう言われても、この地に生まれ育った三膳さんたちには、周囲の自然は「当たり前なもの」ではない。はじめは伊東さんの話に半信半疑。それでもしばらくすると、「そっういへば小さいときに遊んだ湿原に最近行っていないな」ということに三膳さんは思い至る。急にその場所が気になるようになった。「伊東夫妻と話していくうちにどんどんこは『貴重な場所なんだ

なあ』という意識が増したんです。そうしたら、それまで知らなかったけれど、この湿原が好きでわざわざ訪れるという旅行者がたくさんいることも知ったんです。その人たちが『てんぼうだい』に立ち寄るようになったので自然と交流の場となり、彼らの湿原への思いを聞く機会ができたんです」

こんなに湿原のファンがいるのなら、と伊東さんを中心に「霧多布湿原ファンクラブ」が発足した。それが八六年のこと。地元の会員を三〇〇人ほど募り、さらに新聞に霧多布湿原を残したいというメッセージを載せてもらったところ、一



釧路湿原、サロベツ原野に続き、国内で3番目の広さを誇る霧多布湿原（右）。湿原を背にした海岸線近くに、霧多布湿原トラストの事務局兼インフォメーションセンターがある（上）。そのすぐ脇には、湿原内を真っすぐ走る琵琶瀬木道が（下）。





年で一〇〇〇人、二年かららずに
なんと三〇〇〇人という会員が集
まった。それだけ、この湿原に関
心を持ち、美しさに惹かれた人が
いたということだ。ファンクラブ
の会費は千円。それを元手に彼ら
がはじめたのは、湿原の土地を借
りること。通常、保全や保護とい
うと、署名活動や行政への訴えか
けといった主義主張を重んじた軌
跡を描きそうだが、霧多布の場合
はその過程を飛び越え、まず土地
を借り受けることによって保全す
るという一風変わった方法をとっ
たのだ。

「ファンクラブの年会費は千円で
したが、それが直接土地を守る資
金源となるというのは、とても意
義がある、地に足着いた千円だと
思っただけです」

ナショナルトラストによる 保全を取り入れNPO法人に

ファンクラブ発足から一〇年目、
その活動は、またひとつの転機を
迎える。土地を借りている地主さ
んの高齢化にともない、「土地を買
いとつてくれないか」という声か
が上がってきたのだ。ファンクラブ
は任意の団体のため、売買契約は

代表者と地主の個人のものになる
ので難しい。そこで伊東さんが提
案したのは、ファンクラブをNPO
法人にすることだった。

「その時期が、ちょうど伊東さん
がアメリカでNPOの機構を学ん
できたあとだったんですね。ナシ
ョナルトラストという資金を集め
て土地を買い取り、環境を保全す
るというイギリス発祥のスタイル
の活動をしていこう、と。でも当
時はNPOが今のよう一般化し
ていませんでしたから、私たちは
『なに、それ?』という感じでした
(笑)」

こうして生まれたNPO法人
「霧多布湿原トラスト」の理事長に
推されたのが、ファンクラブを裏
方で手伝っていた「普通の主婦」
の三膳さんだった。「今から思うと
物を知らな過ぎて返事をしてしま
ったんですね(笑)」。ご本人の謙
遜とは裏腹に、三膳さんの女性な
らでは目線は、物事の本質を捉
え、建前抜きの本音で話し合いを
し、物事を進めるに大いに貢献し
た。

「まだまだ男社会だと実感するこ
ともありましたが、湿原保存は地
元の話ですから、旦那さんだけで
はいなく奥さんの意見も尊重しな
いといけないですね。だから女性
も意見を言いやすい環境を作った
かったんです。それに子育てもし
ている普通の主婦が理事長をして
いることで、堅苦しい印象が払拭
できるのではないかと」

以来トラストは、土地購入、湿
原を保全するための教育活動、そ
れからファン作りを三本柱に積極
的な活動を行ってきた。過疎化に
より使われなくなった元は湿原の
昆布干場や住宅地を昔の姿に戻し、
湿原の地主さんには買い取らせて
欲しい、とメッセージを書いた手
紙を送り、地主さんが詳しい説明

さまざまなエコツアーの一つ、「長靴トレ
ッキング」。案内人・阪野真人さんのガイ
ドの下、長靴を履いて湿原の感触を足で
感じながら、美しい花に足を停め、動物
の足跡を探し、鳥の鳴き声を楽しむ。四
季折々に違う表情を見せるのでリピータ
ーが多い。取材班が訪れたときは、春を
告げる可愛らしい花々が顔を出していた。
上から水芭蕉、福寿草、タチツボスミレ、
ヒメイチゲ、エゾエンゴサク。



湿地に多く分布するカブスゲは長
い年月をかけて大きな固まりをつ
くる。その様子がお坊さんの頭に
似ていることから地元では「ヤチ
ボウズ」と呼ばれる。





湿原の中には湧き水が多い。1つの湧き水から1日でおよそ10トンもの水が湧き出ているという。豊富な水は小川となり、湿原を潤し多くの植物や動物を育み、たっぷりと養分を含んだ湿原の川はやがては海へと注ぎ込む。浜中町は日本有数の天然昆布の産地だ。

を求めればなにをいっても飛んでいった。道外からツアーを呼んで自然を見てもらい、トラストの活動を根気強く説明していった。今や北海道、東京、鹿児島などを中心に支援団体が立ち上がり、その継続的な資金支援をもとに、トラストが買った湿原は、今や三八ヘクタールにのぼる。

エコツアーを主催して 浜中町全体を盛り上げていく

トラストが指定管理者制度という形で、二〇〇五年四月から浜中町より運営を任されている施設に、霧多布湿原センターがある。湿原を見下ろせる高台に九三年に建てられたセンターは、展望ホールや図書コーナー、地元の特産品が並ぶミュージアムショップを備え、観光客のみならず地元の人々の憩いの場としても機能している。一般客を対象にし、湿原を歩くエコツアーは、六人いるセンターのスタッフ

が中心になって行っている。そのひとり、河原淳さんは三重県の出身。北海

道で環境調査の仕事にかかわるうちに、この土地へと導かれて三年がたった。たまたま大学時代の先生の調査について、浜中町・仲の浜の先一・五kmに浮かぶ無人島、嶮暮^{けんぼ}島に行ったことがきっかけになったという。

「コシジロウミツバメという海鳥を調べにいったのですが、その過程でトウキョウトガリネズミという世界最小の哺乳^{ほにゅう}類が生息していることを知りました。そこで興味を持って調べうちに、すっかりハマってしまいました」

それまで河原さんは環境系のコンサルに従事していた。が、コンサルの仕事は方向性や計画を練り、それを具現化するところまで。その結果どうなったか、どういう経緯をたどったか、検証することなく次の仕事に移らねばならない。

「それが自分の中で不満だったんですね。企業や役所というのは、やはりお金にも時間にも制限があるのでそれも仕方ないのですが、ところがNPOの場合は、そこら辺が緩やかなんですよ」

外の土地から来た河原さんがトラストで活動する中でもっとも感心したのは、浜中の人々の環境や自然、さらには農産物の安全への

元漁師の瓜田さんによる無人島ツアー。湿原から約1kmの所にある無人島に小舟で渡り、草花や野鳥観察を楽しむ。島の環境保護のため、ツアー人数は1日20名に限定されている。他にも「昆布干し体験ツアー」や地元産の酪農製品を食べる「庭先ランチ」など地域の創意工夫を生かしたエコツアーが高い評価を得、NPO法人霧多布湿原トラストは、2007年、環境省の「エコツーリズム大賞」に輝いた。



意識の高さだった。今や農産物の品質保証は当たり前になっているが、浜中の農協では二五年も前から技術センターを設け、乳牛一頭一頭を管理してきたのだという。

その意識の高さは、トラストの理事の八、九割が地元出身者で占められていることから見て取れる。

「環境保護というと大抵、地元以外の僕らみたいなのが来て、守れ、守れという形でやりますよね。でもそれで、うまいこといつているところはあまりないんです。エコだからといって都会発の考えを押しつけて、それ一色で進めるのがダメなのと同じで、その土地土地の文化に沿って行っていくことが大事です。その土地にずっと根付いてきた文化によって、地域の自然が維持されているんですから。やはり地元の人々が納得していないものは、いかに合理的であって

も長続きしないんですよ」
自然保護を継続的にするために

は、何かしら地元への貢献がなければ、と河原さんは提言する。

「トラストではエコツアーも、単に外の人に自然を見せるだけではなくて、それをどう町づくりにつなげるかということを含めて考えています。自然を守るためにはその土地への理解が必要で、す。浜中の自然を見るだけでなく、泊まってもらえば、旅館やコンビニや商店が潤う。牛乳や昆布といった浜中の産業を知ってもらえば、旅から帰ったのちも、それを選んでもらえるチャンスがありますよね」

そうやって循環させ、街のすべての人々が利を得られるように、長い目で見ていくことが継続性のある自然保護につながる、と河原





霧多布湿原は“花の湿原”と呼ばれ、季節を迎えると一面花に覆い尽くされる。エゾカンゾウが満開の霧多布湿原（左）。嶮暮帰島にはシシウドが（右）（写真提供：霧多布湿原センター）。

さんは言う。「一時的にいくら運動しても結果は伴わないんです。やはり続いていかなければ、自分たちが守りたい環境を維持することはできないですよ」。トラストの人々は全国にファンを増やすだけでなく、地元の人々にも気持ちよく保全に理解を示してもらおうと努力を重ねているのだ。

エコツアーの一環として嶮暮帰島へのツアーを主催している「ペンション ポーチ」のオーナーで副理事長の瓜田勝也さんも語る。

「霧多布湿原は浜中町の一町の中にあつて、他の市にまたがっていないので、トラストも活動がしやすいことは幸いでしたね。でも、

僕はこの地で生まれて、誰もが顔見知りという中で育ってきたのですが、そうすると、価値観がこの街の中で固まってしまうんです。だから外の人から霧多布を

知ってもらうのと同時に、観光客と地元の人との橋渡しもしたいと思っているんです。それによって地元の人も意識が変わるし、自分たちの土地を見直すきっかけにもなると思う。気付きの場を作りたいんです」

トラストでは、嶮暮帰島ツアーは一日に二〇人程度、湿原のリバークウォークや長靴トレッキングも一日一〇人程度しか入れないことにするなど、環境に無理を強いな計画を立てつつ、少しでも多くの人にこの希少な自然に直に触れてもらう機会を増やそうと考えている。河原さんは言う。

「自然をそのままに守るのなら、エコツアーを組まず、誰も入れないほうがいいという結論になるかもしれません。でもトラストはこの浜中の自然のサポーターであると同時に浜中町のサポーターとなることを目標としています。そうあつてこそ、活動の意義がより確かなものになると思います」

環境保全には持続性が不可欠 そしてなにより楽しむことが

今や霧多布湿原トラストの活動は、環境保全のモデルケースとなり、行政も開発の予定があると必

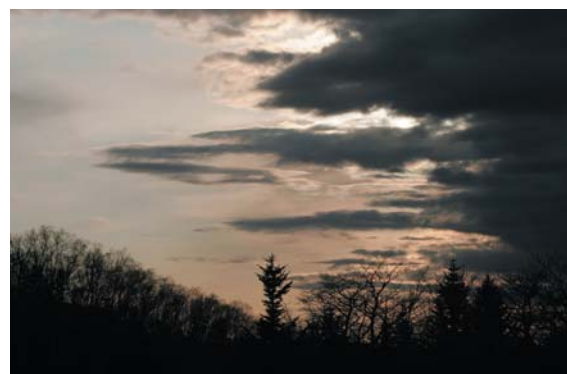
ず概要を説明しに訪れるほど、この土地には不可欠な存在に成長した。しかし発足当時は地元の人々から「湿原を守るといつて、ひともうけするつもりじゃないか」と白い目で見られたこともあった。

それでも二〇年以上も活動が続け、活動が認知されるに従い、「そのままこの自然を残す」という彼らの志は地域に静かに浸透していった。「一〇年くらい前から少しずつ変化がありましたね。地元の人々の目が優しくなった気がします」と三膳さん。大きな企業を引き入れて観光ホテルを建てるのでもなく、むやみな開発をするのでもなく、長い時間をかけて昔ながらの景観を守ることによって浜中町はその存在を広く知らしめ、注目を浴びることになったのだ。

「大きなホテルを持つてくるような開発は、浜中町では難しいと思うんです。それよりも私たちの生活をこれまで支えてくれた、この土地の自然の恵みを大事にするほうがずっとこの土地に即しているのではないかと、思つて。漁業も酪農も自然が壊れたらできなくなります。そういうものを失いたくないし、私にとってここは生まれ

できた土地だし、多分これからも住み続けられると思うんです。だからこそ、他にないこの土地の良さをこのまま残したい、と切に思つたんです」

三膳さんたちトラストの人々は、自然保護を一方的に押しつけたり、開発反対と声を荒らげることはない。かかわった人がみな楽しんで、町全体がよりよくなる道筋を模索しながら、活動を通じて会員の方々自身も霧多布湿原の景観や自然を楽しんでいるようなおもむきがある。その楽しみの延長線上に保全活動を置いたからこそ、活動が継続し、浸透していったのだろう。その歩みを後押ししているのはきっと、自らの生まれ育った土地を誇りに思う気持ちそのものなのだ。



小高い丘の上にある霧多布湿原センターから観る美しい夕日を背景に“家路につく”タンチョウを目にすることも。